

The Learner

Doshisha International Academy Elementary School

July
ISSUE



July, 2026
Volume 169

「キリスト教主義を以って徳育の基本と為せり」 — 小さき者へのまなざしが育むもの —

The Lerner 誌の今年度4月号では、同志社の三つの教育理念である「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」のうち、「自由主義」について取り上げました。今回は、本校の教育理念の根幹にある「キリスト教主義」について考えてみたいと思います。

先日、絵本作家の長谷川義史さんをお迎えし、ご講演をしていただきました。お話や歌、絵を描く実演はどれも素晴らしく、子どもたちも保護者の皆様も深い感動に包まれました。

私が最も心を動かされたのは、絵本『朗読詩ひろしまの子』の朗読でした。この詩は、四國五郎さんが原爆で命を奪われた子どもたちの思いを代弁して創作し、長谷川さんが絵本にした作品です。原爆の前で子どもたちはあまりにも無力でした。「もっと生きたかった」「こんな苦しみを誰にも味わってほしくない」という叫びは、今も私たちに語りかけています。その小さな命の叫びには、人間が大切にしなければならぬものは何かという真実が込められていました。私たちは、長谷川さんの講演から、小さき者の声に耳を傾ける重要性を学びました。

この「小さき者の声に耳を傾ける」という姿勢は、聖書が一貫して語り続けている教えでもあります。『マタイによる福音書』25章40節には、「あなたがたが、これらのわたしの兄弟である最も小さい者の一人にしたのは、すなわち、わたしにしたのである」と記されています。困っている人や弱い立場の人に寄り添うことは、そのままイエス・キリストに仕えることだと教えられています。

この教えを実践した人物の一人が、明治時代の政治家・田中正造です。田中正造は、足尾銅山鉱毒事件の被害者救済のために半生を捧げました。キリスト教徒ではありませんでしたが、キリスト教の教えに深い関心を抱き、聖書を被害者救済のための羅針盤として、日々むさぼるように読んだそうです。当初は自らが農民を救う立場だと考えていましたが、被害者と歩む中で、小さき農民の声を通して、神の真実が示されていることに気づいたのです。救う側だと思っていた自分が、実は小さき者たちから、人間として最も大切なことを教えられたのでした。

近年、「誰一人取り残さない(Leave No One Behind)」という理念を掲げるSDGsが広く知られるようになりました。この理念は、持続可能な社会とは、弱い立場の人々を切り捨てる社会ではなく、最も困難な状況にある人々の尊厳を大切にす社会であるという考え方に立っています。

本校の子どもたちにも、「私たちの社会は、本当に誰一人取り残さない社会になっているだろうか」と問い続ける姿勢を育んでほしいと願っています。そして、困っている人や声を上げられない人に目を向け、その声に耳を傾けることのできる人へと成長してほしいと思います。

小さき者へのまなざしを失わないこと。小さき者の中にこそ、人間が進むべき道を示す真実があると信じること。それこそが、同志社が創立以来大切にしてきた「キリスト教主義」の精神であり、本校が子どもたちに伝えていきたい教育の原点でもあるのです。

校長 和田喜彦



キリスト教教育

7月：平和 July: Peace

「神の霊がサウルを襲う度に、ダビデは琴を手にして爪弾いた。
するとサウルの霊は休まり、良くなって、悪い霊は彼を離れた。」

サムエル記上 16 章 23 節（聖書協会共同訳）

とある老人ホームで、認知症が進むにつれて言動が荒くなってきた方のお話を聞いていて、心が痛みました。ただでさえ限られた施設の空間で日常を過ごしているのに、徘徊が危ないからと自由に外へ出してもらえない時の鬱屈感は、察するに余りあります。仕方がないこととはいえ、この方が少しでも穏やかに時間を過ごせる良い方法はないものかと思案するうち、ふと以前聞いたことのある音楽療法の話を思い出しました。

昔その人が好きだった歌を聴いたり口ずさんだりすることは、もちろん効果のある音楽療法の一種だと思いますが、残念なことに CD などの電子音では、人間の耳には直接聞こえないが脳に働きかけて心地良さを感じさせる超高周波の部分がカットされてしまうのだそうです。だから、本当はライブで音楽を聞いてもらうのが一番です。しかしながら、いつも演奏者がそばにいてくれるとは限りません。そこで「オルゴール」や「竖琴（音楽療法用に開発された小型ハープ）」などの出番となります。

オルゴールは機械ですが、ものによってはミニオーケストラ同様の重厚な心地良さを聴き手に与えることができますし、逆に弦の少ない竖琴は患者本人が演奏家になり、達成感と満足感を得ながら心地良いゆらぎを肌身に感じることができます。

上掲の聖書箇所は、古代イスラエルの初代王であったサウルという人物に音楽療法を施すダビデ少年（後にサウルから命を狙われるが、彼の死後、王位に就いた）の様子を描いています。サウルは「優れた若者で、その美しさに並ぶ者はイスラエルにおらず、民の誰よりも肩から上の分だけ背が高かった。」（サムエル記上 9 章 2 節）と書かれるほどの恵まれた容姿を持っていました。若いうちこそ純粋な心で神の言葉に聞き従っていましたが、武功を修めるうちに段々と傲慢になり、神の言葉よりも自分自身の欲望を優先して行動するようになりました。結果彼は神から見放され、代わりに悪い霊から苛まれるようになったといえます。

ここで「悪い霊」と書かれているものを物の怪か何かの類に考える向きもありますが、サウルとダビデの物語を辿りながらこの場面を現代風に読み解くと、それは他者への嫉妬やそれに伴う猜疑心で自らをがんじがらめにし、精神を病んでいる人の状態とも言えそうです。

決して前述の老人の症状を悪霊呼ばわりするつもりはありませんが、若き日に強かったり、美しかったりした人ほど、過去を失った今の自分への苛立ちや悲しみは倍増しているかも知れず、それはあたかも若くて有能なダビデを妬み、命まで狙うようになったサウルの心情に通じるものかも知れません。

奏者ダビデのような慰めを与えてくれるオルゴールが、あるいは自らが奏者ダビデになりきって奏でられる竖琴が、一人でも多くの認知症患者に届けばよいのにと願う日々です。

Christian Education Committee チャプレン 石川眞弓



<お知らせ>

○7月のおにぎり献金は、7月14日(火)です。

- ・国内：岩手キリスト教学園認定こども園宮古ひかり、福島県の若松聖愛幼稚園、熊本県の慈恵病院「こうのとりのゆりかご」、北陸学院キリスト教センター（石川県能登半島地震支援金口）
- ・海外：日本ユニセフ協会「人道危機緊急募金」

今年度は上記の施設にお捧げします。ご賛同いただける方は、お子様に献金をお持たせください。

田植え体験を通して学ぶ食と農業

～Unit1「農業」 木津川市での田植え体験～

私たちが毎日当たり前のように食べているご飯。そのお米がどのように作られ、どれほど多くの人の努力によって食卓に届いているのかを考える機会は、意外と少ないかもしれません。5年生はUnit1「農業」の学習の中で、食料生産や農業の役割について探究を深めてきました。日本の食料自給率や農家の高齢化、気候変動による農作物への影響など、農業が抱える課題について学ぶ中で、子どもたちは「自分たちの食べ物は誰が作っているのだろう」「これから先も安定して食べ物を作り続けることができるのだろうか」といった問いを持つようになりました。

授業の中で、「農家の仕事をしてみたいと思いますか」と子どもたちに尋ねてみました。すると、「朝早くから働かないといけないから大変そう」「天気が悪くなったら収穫できなくなるから不安」「休みが少なそう」といった声が多く聞かれました。一方で、「自分で育てた野菜やお米を食べられるのは楽しそう」「人の役に立つ仕事だからやりがいがありそう」という意見もありました。子どもたちなりに農業の大変さと魅力の両方について考えていることが伝わってきました。

さらに、「農家の人たちはどんな工夫をしているのだろう」「どうすればもっと農業が続けやすくなるのだろう」と問いかけると、「ロボットが作業を手伝ったらいい」「暑さに強い品種を開発したらいい」「もっと多くの人が農業に興味を持てるようにしたらいい」など、さまざまなアイデアが出されました。子どもたちは単に農業の課題を知るだけでなく、未来の農業について自分なりに考え始めているようでした。そんな学びをさらに深めるため、5年生は木津川市で田植え体験を行いました。田んぼへ向かうバスの中では、「泥の中に入るのは初めて」「ちゃんと歩けるかな」「転んだらどうしよう」と少し緊張した様子も見られました。普段の生活では土や泥に触れる機会が少なくなっていることもあり、多くの子どもたちにとって田んぼは未知の世界だったようです。

現地に到着し、農家の方から苗の植え方や田植えの意味について説明を聞いた後、いよいよ田んぼの中へ入りました。最初の一步を踏み出した瞬間、「うわー!」「冷たい!」「足が抜けない!」という大きな歓声があがりました。泥の感触に驚きながらも、少しずつ慣れてくると笑顔が増え、友達同士で声を掛け合いながら苗を植えていきました。

田植えは想像以上に体力のいる作業でした。まっすぐ植えようとしても思うようにいかず、足元も不安定です。それでも子どもたちは、一株一株丁寧に植え続けました。「先生、もっと苗をください!」「思ったより楽しい!」という声も聞かれ、いつの間にか夢中になって作業に取り組んでいました。短い時間ではありましたが、実際に体験することで、農家の方々が日々行っている仕事の一端を感じることができたようです。



その後、農家の方からお米作りについてのお話を伺いました。田植えが終わればそれで終わりではなく、水の管理や雑草対策、病気や害虫への対応など、多くの仕事が収穫まで続くことを知りました。また、近年は気温の上昇や天候の変化によって、農作物づくりがさらに難しくなっていることも教えていただきました。子どもたちは真剣な表情で話を聞きながら、「お米ができるまでには本当にたくさんの努力が必要なんだ」と実感している様子でした。

体験を終えた帰り道には、「これからはご飯を残したくない」「農家さんにありがとうと言いたい」「秋の収穫も見てみたい」といった感想が聞かれました。田植えを通して、ただ農業の知識を学ぶだけでなく、自分たちの食事と農業とのつながりを実感することができたのだと思います。

今回の体験は、農家の方々の苦労や工夫を知る機会であると同時に、自然の中で体を動かし、土や水に触れながら学ぶ喜びを感じる機会にもなりました。普段は教室で学んでいる内容が、実際の体験と結びつくことで、子どもたちの理解はより深いものになったように感じます。

5年生は、今回の経験をもとに農業や食料生産についてさらに探究を進めることができました。自分たちが毎日食べている食事がどのように作られ、どのような人々によって支えられているのかを考え続けることで、食べ物への感謝の気持ちや、未来の農業について主体的に考える力を育てていってほしいと思います。



Inquiry in Action

Dear Parents,

As we reach the end of the first term, I would like to highlight two examples of how students are actively leading their own inquiry in the classroom.

In Grade 6, I observed students in the English-language Unit of Inquiry developing their own Lines of Inquiry and Central Ideas. I was impressed by how capable the students were at handling this complex task when it was structured clearly; it demonstrated that when given a clear framework, students can take significant responsibility for their own learning.

Meanwhile, our Grade 3 students have been deeply engaged in inquiry-based lessons that use their own natural curiosity as the primary driver. By identifying the questions that matter most to them, these students are learning that their wonderings are a valid and powerful starting point for academic exploration.

Whether through the grade-wide inquiry in Grade 3 or the student-led inquiries in Grade 6, we are seeing that students engage more deeply when they have a role in shaping their learning.

You can support this at home by asking:

- "What was a question you explored today?"
- "What was the main focus of your work in class?"

By valuing the questions our students generate, we encourage them to think more independently.

探究の実践

保護者の皆様

1 学期の終わりを迎え、教室で生徒たちが自らの探究を主体的にリードしている様子の具体的な事例を 2 つご紹介いたします。

6 年生の英語で行われている探究ユニット（Unit of Inquiry）では、児童たちが自分たちで「探究の線（Lines of Inquiry）」や「中心概念（Central Idea）」を考え出し、調査の枠組みを設計している様子が見られました。明確な構成さえあれば、児童はこれほどまでに複雑な課題を自律的にこなせるのだと実感させられました。これは、明確な枠組みが与えられれば、児童が自らの学びに対して大きな責任を持てることを示しています。

一方、3 年生は、彼ら自身の自然な好奇心を原動力とした探究クラスに深く取り組んでいます。自分にとって重要な問いを見つけることで、児童たちは「自分の『不思議』は、探究の出発点として活用できる」ということを学んでいます。

3 年生の学年全体での探究学習や、6 年生の英語探究ユニットの事例を通して、児童が自分の学びに関与することで、より深く学習に取り組む様子が見られています。

ご家庭でも、ぜひこのような問いかけを通じてサポートをお願いします：

- 「今日、どんな質問について探究したの？」
- 「授業では、どんなことに一番取り組んでいたの？」

児童たちが自分自身で問いを立てることを大切にすることで、私たちは彼らがより自立した思考者へと成長するのを後押しすることができます。

敬具

クリス・エルストン PYP コーディネーター



梅雨空の下にも夏を思わせる日差しが降り注ぐ頃となりました。春学期も終わりに近づき、学校の中には、どこか節目を迎える前の落ち着きと、次へと向かう静かな気配が同時に漂っています。4月から続いてきた日々が、子どもたち一人一人の中で少しずつ形を帯び始めているようです。

積み重なってきたもの

日々学校の中を歩いていると、「いつの間にか」という言葉がふと浮かぶ瞬間に幾度も出会います。4月には戸惑いながら交わっていた挨拶が、今では自然に交わされていること。遠慮がちだった関わりが、言葉を伴いながら少しずつ広がっていること。教室の中での立ち居振る舞いや、学びに向かう姿勢にも、それぞれの子どもの「かたち」が見え始めています。

それは決して大きく目立つ変化ではありません。むしろあまりにも日常の中に溶け込んでいるために、気づかれにくいものでもあります。しかしその一つ一つは、4月から続いてきた日々の中で子どもたちが自分なりに試し、迷い、選び取ってきた確かな歩みでもあります。目には見えないところで、それぞれの経験が織り重なり、今日の子どもの姿を形づくってきたことを感じさせます。

6月には「慣れ」の中で生じる揺れやほころびについて触れました。あの時期に見られた戸惑いや行き違いは、一見すると後退のようにも映りますが、実際には自分の立ち位置を確かめ直すための大切な過程でした。張りつめていたものがほどけることで初めて見えてくるものがあり、そこから改めて自分なりの関わり方や在り方を編み直していく。その営みの中で子どもたちは少しずつ自分の足で立つ感覚を確かなものにしていきます。今、学校の中で見られる穏やかな日常の背景には、そうした見えにくい試行錯誤の時間があります。その過程を経ているからこそ、今の自然さや落ち着きが生まれているのだと感じています。

夏へと向かう時間

あと3週間ほどで迎える夏休みは、学校という枠組みから少し離れ、時間の流れや経験のあり方が大きく変わる時期です。日々の時間割に沿って過ごすのではなく、自分で時間を組み立てていく場面も増えていくでしょう。その中で子どもたちは、「何をするか」だけでなく、「どのように過ごすか」「どのように感じるか」といった自分自身との向き合い方を自然と深めていきます。

特別な体験である必要はありません。少し時間をかけて何かに向き合ったことや、思い通りにいかない時間をどう過ごしたかという記憶は、やがてその子の内側に静かに残り続けます。学校の枠の外で過ごす時間の中にこそその子らしさが表れ、新たな気づきが生まれていきます。

ご家庭におかれましては、この春学期を振り返る中で、「何ができるようになったか」という結果だけでなく、「どのように日々を過ごしてきたか」という過程にも目を向けていただけたらと思います。何気なく続けてきたことや、本人なりに乗り越えてきた場面に言葉を添えてもらえることで、子どもたちは自分の歩みを自覚し、次へと進む力を蓄えていきます。また、夏休みという少しゆるやかな時間の中で、結果を急がず、その子なりのペースを大切にすることも、長い目で見たときの確かな力へとつながっていくでしょう。

学校においても春学期の終わりを単なる区切りとして捉えるのではなく、それぞれの子どもたちが歩んできた過程を丁寧に見取り、秋学期へとつなげていくことを大切にしています。一人一人の変化が持つ意味を見失うことなく、子どもたちが安心して次の一步を踏み出せるよう、引き続き環境を整えていきたいと考えています。

夏休みは子どもたちにとって世界が広がる時間である一方で、普段とは異なる環境の中に身を置く機会も増えていきます。気づかぬうちに無理を重ねたり、心や体の小さな変化に気づくのが遅れたりすることもあります。だからこそこの時期は「思いきり過ごすこと」と同時に、「自分の体や命を大切にすること」を日々の中で少しずつ意識していくことが大切になります。こまめに休むこと、水分をとること、無理をしないこと。そうした一つ一つの積み重ねが、安心して夏を過ごすための土台になります。保護者の皆さまにおかれましても、日々の声かけを通して子どもたちが自分で自分を守る感覚を育てていただければと思います。

季節は大きく移ろい、子どもたちを取り巻く環境もまた変化していきます。その中でそれぞれの内側に育ってきたものが、これからどのように広がっていくのかを楽しみに見守っていきたいと思います。春学期の子どもたちの歩み、そしてそれを支えてくださった保護者の皆さまの日々感謝しながら、実りある夏の日々となることを願っております。



からのおしらせ

夏休み特別貸出はじまります

今年度の夏休み特別貸出は **7/6(月)～7/17(金)** となっています。和書・洋書 5 冊ずつ、計 10 冊の本を借りられます。

※借りたい本がしっかり入るように大きくて厚手の布バッグを用意してください。

2026 年度 課題図書入りました！



課題図書もたくさん借りてね。



7月11日はラーメンの日

一般社団法人日本ラーメン協会が制定。

ラーメン産業の振興・発展とともに、日本独自のラーメン文化を支えるのが目的。日付は7と11の7をレンゲに、11を箸に見立てたことと、ラーメンを最初に食べた人物とされる水戸黄門（水戸光圀公）の誕生日（新暦・1628年7月11日）から。（日本記念日協会 HP より）

7月の主な行事・予定

7月18日(土)～8月26日(水) 夏季休業日

1	水	
2	木	
3	金	
4	土	
5	日	
6	月	
7	火	
8	水	クラブ/ Club activities
9	木	Swimming (G1, G2, G3)
10	金	
11	土	
12	日	
13	月	学期末カンファレンス (AM lesson) End of the spring trimester
14	火	学期末カンファレンス (AM lesson) End of the spring trimester
15	水	学期末カンファレンス (AM lesson) End of the spring trimester
16	木	午前授業 AM lessons
17	金	終業礼拝/ Closing worship service 学校安全点検日/ Safety check up day
18	土	
19	日	
20	月	海の日/ Marine Day(National Holiday)
21	火	
22	水	
23	木	
24	金	
25	土	
26	日	
27	月	
28	火	
29	水	
30	木	
31	金	

8・9月の主な行事・予定

8/27(木)	始業礼拝 / Opening Worship service PYP Planning のため午前授業 / AM lesson
9/2(水)	入試準備のため午前授業 / AM lesson)
9/3(木)	自宅学習日(入試のため) /2027 Entrance Exam ～4(金)
9/9(水)	G3 宿泊学習/ G3 Overnight Trip ～11(金)
9/15(火)	G6 修学旅行/ G6 Overnight Trip ～18(金)